

『高校日本史』を用いた授業構想

——近世の「時代を通観する問い」の学習をめぐって

豊田 基裕

はじめに

今年度から始まっている「歴史総合」は、世界史と日本史が融合した新科目ということで早くから関心が高く、実践事例も集まってきている。それに比べると、「日本史探究」に関する議論はまだこれからだろう^①。そこで、まず旧課程の「日本史B」と比べて「日本史探究」の特徴的な点を3つあげてみる。

(1) 中学校社会科や「歴史総合」との強い連続性

とくに「近現代史の指導に当たっては、『歴史総合』の学習の成果を踏まえ、より発展的に学習できるように留意すること」(学習指導要領「内容の取扱い」(1)カ)とある。「日本史探究」では、「日本史B」で扱っている内容が減じられたわけではないにもかかわらず、標準単位数が4から3となる。これまで以上に時間が限られるため、授業者には、生徒の既習の歴史科目の指導内容や定着状況を確認したうえで、「日本史探究」の学習内容を精選し指導することが求められる。

(2) 内容構成と授業者の「問い」

学習指導要領にはA原始・古代→B中世→C近世→D近現代の順に授業をおこなうよう明記されている。つまり、旧課程でみられた近現代を先修するような指導計画は不可であることを意味する。そして、A～Dともに(1)時代を通観する問いを表現する→(2)各時代の特色について仮説を表現する→(3)(主題を設定し)歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現する、というプロセス(Dのみ(1)→(2)→(3)→(4)現代の日本の

課題の探究)を繰り返し学習していくことが示されている。そこで重要となるのが、各プロセスにおいて深い学びへ導くような授業者の的確な「問い」「問いかけ」になってくる。

(3) 資料の活用と「探究」

「日本史B」では科目の導入に「歴史と資料」、中世に「歴史の解釈」、近世に「歴史の説明」、科目のまとめに「歴史の論述」がおかれているが、「日本史探究」では、各時代における諸資料の活用と、A～Cの各時代の(3)でそれぞれ「歴史の解釈、説明、論述」をおこなうよう求められており、「探究」的な学習活動が強調されている。

以上の点をふまえて、山川出版社が刊行する「日本史探究」の教科書『高校日本史』(日探706、以後、教科書)の作りについて、授業者の視点から旧課程版と比較して、ポイントをあげると、つぎようになる(細かい編集や体裁の工夫などに関しては同社のパンフレットを、もう1冊の「日本史探究」の教科書『詳説日本史』(日探705)については本誌前号(太田尾智之筆)を参照いただきたい)。

- ・判型が大きくなった(A5判→B5判)。
- ・注が本文の下から横へ移り、諸資料(史料や図版・地図)にはすべて番号が振られてその番号が本文中に付されているため、参照しやすい。
- ・史料に付された2次元コードからは現代語訳のテキストが表示される。
- ・各章冒頭に学習内容に関わる導入文(時代の特色と問い)がある。
- ・本文に対応する「Q」(問いかけ)がある。
- ・本文の流れにそって、史資料の読解や解釈、

説明をうながす「読みとき」がある。

- ・興味関心を高め、探究の視点となるような「Topic」がある。
- ・章末に「まとめ」の問いが設けられている。

このように、一目で新学習指導要領をふまえながら、幅広い学力層の生徒に学びやすい作りとなっていることが確認できる。

では、これらのポイントを活かして、C近世を例に、学習指導要領でとくに重視されている「時代の転換」を理解して「時代を通観する問い」を立てる授業を、教科書を用いて構想してみよう。

時代を通観する問いを立てる授業展開案

(1) 指導計画

教科書では、近世に関する「時代を通観する問い」を表現する学習は、第Ⅲ部「近世」の第8章「近世の幕開け」のなかで取り扱う。標準3単位の年間指導計画を想定して、第8章は以下の通り全4時間の単元構成とする。

第8章「近世の幕開け」

① 天下人の登場①(1時間)

近世への転換／銀の交易と鉄砲伝来／キリスト教と南蛮貿易

② 天下人の登場②(1時間)

織田信長の政権／豊臣秀吉の全国統一

③ 豊臣政権と桃山文化①(1時間)

検地と刀狩／秀吉の外交

④ 豊臣政権と桃山文化②(1時間)

桃山文化／芸能と風俗／国際的な文化の交流

つぎに、④に含まれる「時代を通観する問い」を表現する学習活動の授業展開案を示す。

(2) 授業展開案

「時代を通観する問い」を立てる学習活動は、これから学習する時代の冒頭に設定されている。既習事項である前の時代(本時の場合は中世)との比

較などを通じて「時代の転換」について理解したうえで、新たな時代(本時の場合は近世)の特色と歴史の展開を探究することがめざされている。ここで前提となるのは、「はじめに」の(1)で触れた、中学校社会科歴史的分野や「歴史総合」との強い連続性である。織豊政権や江戸時代の特色と展開は中学校で一通り既習しており、「歴史総合」でも、たとえば山川出版社の教科書『わたしたちの歴史日本から世界へ』(歴総709)のp.36～37に「考えてみよう！ 江戸時代」と題した特集ページがあり、学習する機会がある。

また、「歴史総合」で問いを表現する学習は重ねてきている。加えて、「時代の転換」については、教科書p.108の「近世への転換」で概要はつかんでいる。

こうした積み重ねのうえに、「時代を通観する問い」を立てる学習はある。教科書の各章末には、生徒が問いを立てるための視点やヒントが用意されており、p.116には「第8章のまとめ」として、以下の記述がある。

- 国際交流の進展や全国統一など、どのように時代が転換したのかに着目し、近世の特徴について、中世や近代とも比較して問いを表現してみよう。

ここでは、近世の特徴についての問いを表現するために、時代の転換を「国際交流」や「全国統一」という視点でとらえ、近世前後と比較するという方法が示されている。

時代の転換については、教科書p.108の「近世への転換」で学習した内容を確認しよう。

【板書(スライド提示)例】

1. 国際的な交易が活発化(16C半ば～)
 - ・ヨーロッパ人がアジアの交易ルートに参入
 - 外来の技術・思想の伝来
 - (ex. 鉄砲やキリスト教の伝来、銀の交易)
 - 有力な戦国大名が領国を統合

2. 豊臣秀吉の全国統一

- ・新しい支配の仕組みの整備
 - ・朝鮮侵略の強行
- 明を中心とする東アジアの国際秩序動揺

そして、第三部「近世」の扉におかれている年表で、近世という時代を概観させる。その際、さかのぼって第二部「中世」やこの先の第四部「近代・現代」の同年表にも目を配って、前後の時代と比較させたい。

では、1つ目の「国際交流」という視点を考えてみよう。豊臣秀吉の朝鮮侵略(文禄・慶長の役)の失敗を受けた徳川家康は、朱印船貿易を推進し、東南アジア各地に日本町が形成された。その後、3代将軍家光の時代までに、幕府が認める「4つの窓口」を通して異国・異民族との交流をもつ「鎖国」という外交秩序に整えていき、200年以上にわたって鎖国体制が続いた。この直接の武力によらない外交と貿易の関係を近世の特徴とした時、勘合貿易断絶とともに活発になった後期倭寇や琉球王国の中継貿易、そして南蛮貿易・南蛮文化など、近世以前の世界やアジアの交易が活発な時期(教科書p.90~92の「明との通交」「日朝貿易と琉球・蝦夷」や本単元I④)からの移り変わりをとらえるとともに、ペリー来航による「開国」から琉球処分までの動きによって近世の国際関係が再編されること(教科書p.164~169の「ペリー来航」「不平等条約」「国内経済への影響」およびp.182~185の「文明開化」「明治初期の対外関係」)をふまえて、「時代を通観した問い」を表現することとなる。国際交流であるから、当然、外交や貿易の相手となる日本を取り巻く国や民族など、東アジア世界の動きに目配りすることが欠かせない。

なお、近世の「国際交流」を扱う際に、「鎖国」または「開国」という語にともなうイメージや語感には留意したい。「鎖国」という語から江戸幕府の外交秩序を想起した時、マイナスの印象を抱く生徒

は少なくないだろう。教科書p.131注④にあるように、1801年に志筑忠雄の『鎖国論』の登場まで使われることのなかった「鎖国」という語は、ペリー来航以後に定着した。一方、「開国」という語の定着は、19世紀末だという。安政の五か国条約によって新たに開港した4港はいずれも幕府の直轄領にあり、実態としては4つの窓口が8つになった、つまり「鎖国」の延長だととらえることも可能である⑧。それが、明治政府が1894年に条約改正に成功して国家目標である「万国対峙」が成就して、欧米諸国への「開港」=「開国」になったという。ここに、プラスイメージの「開国」に對置するマイナスイメージの「鎖国」という2語の関係が定着した⑨。こうしたことに配慮しながら、自由(=南蛮貿易や朱印船貿易)→制限(=「鎖国」)→自由(=「開国」)、という大きな枠組みの変容を念頭において、生徒に問いを表現させたい。たとえば、以下のような問いが考えられる。

- ・欧米諸国がアジアへ進出してくるなかで、日本の対外関係(あるいは外交秩序)はどのように推移していったのだろうか。
- ・「鎖国」前後で、国家・社会経済・文化はどのように変化したのだろうか。

つぎに、2つ目の「全国統一」という視点を考えてみよう。教科書p.164~166の「ペリー来航」にも載っている「太平のねむけをさます上喜撰たった四はいで夜るもねられず」の狂歌を知っている生徒は多いだろう。ペリー来航で打ち破られた太平(泰平)の世、すなわち幕府と藩が統治する社会の制度が整い、経済が発達し、独自の文化も形成された日本史上でもまれな平和と安定の時代(「パクス・ロマーナ」を真似て「パクス・トクガワーナ」ともいわれる)を、近世の特徴としてとらえることができるだろう。この太平の世は、大坂夏の陣をもって到来したと17世紀後半には認識されていた⑩。

100年にわたって続いていた戦国の動乱は、16世紀後半の20年ほどで織田信長によって全国統一の動きが進み、豊臣秀吉によって完成した。そして、秀吉の死後、徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利し江戸幕府を開設したのち、1615年の大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼし、250年続く太平の世の基礎が築かれていった。幕府のほか、およそ260の藩がそれぞれ独自の政治や税の徴収をおこない、全国の土地と人々を統治した。その後、15代将軍徳川慶喜の大政奉還によりこの太平の世は幕を閉じ、王政復古、版籍奉還、廃藩置県によって、天皇を頂点とするより強力な近代国家建設がめざされた。

統治のあり方の移り変わりについて、戦国時代が室町幕府の衰退による地方分権型だとすると、織豊政権期には全国統一事業で中央集権型となったが、江戸幕府は幕藩体制という地方分権型で安定し、明治維新によって天皇中心の中央集権型へと強化されたとみることができる。生徒にはこうした大局的な流れをおさえさせたい。たとえば、「時代を通観した問い」の表現へとつなげたい。たとえば、以下のような問いが考えられる。

- ・世界・アジアの交易が活発になるなか、国を統治する仕組み(あるいは国家権力のあり方)はどのように変容していったのだろうか。
- ・なぜ、日本は分裂せず(あるいは再び戦国時代にならず)、外国の植民地にもならず(あるいは外国とは戦争にならず)、250年続いた太平の世の末に明治維新を実現できたのだろうか。

おわりに

この「時代を通観する問い」は生徒みずからを立てなければならないため、「日本史探究」ではもともとハードルの高い学習だと感じる^⑤。ただ、歴史総合で生徒みずからが問いを立てる学習方法を繰り返して、歴史的思考力をつちかっけていければ、その後の「日本史探究」に対しても生徒は抵

抗なく学習していけるのではないだろうか。それどころか、従来の講義型の授業方法や大量の知識・情報の吸収からの脱却がめざされるなかで学ぶ生徒は、授業者の想像以上にみずから問いを立て、仮説を検証し、理解を表現することに意欲的に取り組むかもしれない。

とはいえ、「歴史総合」もそうだが、授業者にとっては、従来の指導方法からの転換がせまられ、高い専門性をもった指導力が要求されている。多忙な現場では、新科目への理解や教材研究は十分でないだろう。すべての単元に独自教材を準備し新しい教育手法を導入することは現実的とはいえない。そうした状況に対応するためにも、教科書には上記のように学習指導要領のねらいを達成できるような様々な工夫がこらされている。これまで以上に教科書を活用し、「日本史探究」に備えたい。

また、筆者は現在テレビで放送中の歴史教養番組^⑥を、授業作りのヒントにしている。場合によっては、一度生徒に視聴させてみることで、問いを立てる、仮説を表現する、主題を設定する、根拠を示すといった学習方法を具体的にイメージさせることができるかもしれない。まだ、「日本史探究」の実践は多くない^⑦が、これから様々な取組や議論が積み重ねられて、よりよい「日本史探究」の授業が実現していくことを期待したい。

① 戸川点「『日本史探究』をどう教えるか」(『拓殖大学教職課程年報』2、2019年)。

② 中公新書編集部編『日本史の論点——邪馬台国から象徴天皇制まで』(中央公論新社、2018年)。

③ 荒野泰典「近世の国際関係と『鎖国・開国』言説——19世紀のアジアと日本、何がどう変わったのか」(『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』11、2015年)。

④ 藤井謙治『シリーズ日本近世史1 戦国乱世から太平の世へ』(岩波書店、2015年)。

⑤ 島村圭一・永松靖典編『問いでつくる歴史総合・日本史探究・世界史探究——歴史的思考力を鍛える授業実践』(東京法令出版、2021年)に、小林武史氏の近現代の「時代を通観する問い」を表現させる実践が所収されており、参考になる。

⑥ たとえば、以下のテレビ番組がある。

1 つ目は「にっぽん! 歴史鑑定」(毎週月曜22:00/BS-TBS)。

時代や人物、できごとなど歴史上のテーマについて、真相を探り史実を解き明かしていく番組。

2つ目は「英雄たちの選択」(毎週水曜22:00/NHK BSプレミアム)。歴史上の人物が決断をせまられた際の葛藤に注目し、複数の選択肢を提示する番組。

3つ目は「歴史探偵」(毎週水曜22:30/NHK総合)。日本史上のテーマやできごとに対する仮説(新説)を、現場検証や科学シミュレーション等を駆使して検証していく番組。

⑦国立教育政策研究所教育課程研究センターが「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(高等学校)地理歴史」(WEB版と書籍版がある)で日本史探究の単元や題材にもとづく学習評価について2事例を示しているほか、注⑤で示した書籍に日本史探究の学習を見据えた6本の実践事例が紹介されている。

また、アクティブ・ラーニングを実践するうえで効果的なツールとして注目されている「ICE(アイス)モデル」(カナダで実践されている、Ideas〈知識〉、Connections〈つながり〉、Extensions〈応用〉を軸とした、評価と学習方法)を日本史探究で用いた授業として、三浦隆志氏の実践が『歴史教育「再」入門——歴史総合・日本史探究・世界史探究への“挑戦”』(清水書院、2019年)に掲載されている。ちなみに、注⑥で紹介した「英雄たちの選択」というテレビ番組では、「もしあなたが〇〇だったら、どうするか」というExtensionsのフェーズの問いかけがなされている。

なお、筆者が事務局をつとめる全国歴史教育研究協議会(全歴研)が2021年にオンラインで開催した第62回研究大会(大阪大会)では、「日本史探究をどのように学ぶか」というテーマで3本の実践報告があり意見交換がなされた。今年7月にオンラインで開催する第63回研究大会(茨城大会)でも日本史探究に関する3本の報告を予定している。詳細は全歴研ホームページを参照してほしい。

(とよだ・もとひろ/東京都立大江戸高等学校教諭)